

に2,100万円の資金を調達することができた。資料館の建物は、旧沢内病院の看護婦さんの寮(豪雪モデル住宅第一号)となっていたもので、これを改築して資料館として使用している。

深澤元村長当時の沢内村は、東北大学から加藤邦夫先生に来てもらうまでは、熱意ある医者が少なかった。深澤元村長が東北大学に交渉して医者を派遣してもらったようになってから、素晴らしい先生に来てもらえるようになった。

● 深澤晟雄元村長の功績

深澤元村長は、もの凄いい能力の持ち主で、東北大学の法文学部を卒業し、村に帰ってから教育長・助役を経験された後、村長になった。村は、日本有数の豪雪地帯であり、冬季は陸の孤島となってしまう。深澤元村長は、憲法25条のつとり、法律で訴えることで現状を変えようとした。

昭和29年に教育長、昭和31年には助役に就任後、昭和32年に、第18代沢内村長に当選し、「豪雪・多病多死・貧困」の三悪追放を目指した。一例としては、住民からしたらさちがい沙汰にみえたと思うが、昭和33年、豪雪を克服するため当



顕彰碑

顕彰碑文(深澤晟雄氏業績)

沢内村の自然は美しい。然し、冬季は厳しい豪雪のため原始社会に還り交通はもとより、産業も文化も麻痺状態に入り、しかも、生命を維持する最低の医療手段さえ失う生活を余儀なくされた。昭和三十三年深澤晟雄氏村長に就任するや、理想高く正義感の強い氏は、この自然の猛威を克服することを悲願として奔走。ついに村と県都盛岡まで冬季交通を確保し、特に医療行政において老弱者、乳児に対する国保の十割給付を断行。村民の平均寿命の延長、乳児死亡率の半減の金字塔を打ち樹てたことは村史に銘記すべき不滅の業績である。六千村民の輝かしい偉業を受け継ぎ、更に本村の発展と飛躍を期し「村民の道標」として、茲に氏の胸像を建立永く記念するものである。 1966(昭和41年)9月建立

時数百万円もするブルドーザーを買って、除雪を開始した。昭和35年には、65歳以上の高齢者に国保の10割給付を断行した(昭和36年には1歳児未満と60歳以上に拡大)。昭和37年、乳幼児死亡ゼロの偉業を達成した(わが国地方自治体初の快挙)。また、深澤元村長は、赤ちゃん一人一人の名前を覚え、常に気に掛けていたと言われている。

深澤元村長は、行政から何かやってもらうのではなく、住民自らのやる気、行動を引き出すことにたけており、常に住民と対話し、「行政と住民が一体となって歩んでいくことが大切であり、村民が力を合わせればどんなことでもできる」と言っていた。

● 陸前高田市へ復興支援

本会では震災以降復興支援活動も行っており、10月28日に、1年ぶりに、横田中学校で陸前高田市復興支援活動を行った。当日はあいにくの雨模様ではあったが、町内外からボランティア24人が参加、食材の提供や活動費の支援など、多くの方々に支援されながらの活動だった。昼食は、おにぎり・きのこ汁・漬物などの西和賀の秋の味覚に、さんまの塩焼き・

お寿司。おにぎり作りには横田中学校校仮設住宅の女性10人が参加し、「おにぎり交流」で絆を深めることもできた。舞台では、「さわうち太鼓」が好評を博し、西和賀文化が誇る三味線に尺八と唄・踊りも喜んでもらえた。「沢内さんさ踊り」では、仮設住民も参加して会場には「復興の絆の輪」ができていた。山中紅



● 西和賀文化が誇る三味線に尺八、唄、踊り



● 横田中学校校仮設住宅での交流

香さんの講談「いのちの山河」では、「人間愛の絆」や「どんな困難も団結すればできる」という深澤精神を、皆さんかみしめ、感動されていた。今回の支援活動に携わって頂いた多くの方々には感謝したい。

● 今後に向けての抱負

全国各地には、深澤晟雄の根強いファンが居るものの、県内に住む方で、深澤晟雄という人物を知っている人が少ないのが現状である。宮沢賢治や石川啄木と言えば、県内外を問わず、かなりの方々が知っている。政治に命をかけた、「生命尊重」の理念を抱いて生きられた、「深澤晟雄」という人間をもっともっと沢山の方々に知って頂きたい。経済的な豊かさというものは、何かのきっかけであっさりともすぐに崩れ去ってしまう。東日本大震災の津波の被害にしても、その最たるものである。健康で長生きするということを一番に考えた、「生命の尊重」を最も大切な理念として後世に伝えていきたい。今後も、全国規模で色々な発信をしていきたい。

「深澤晟雄」の功績を後世に伝えていくためにも、功績を顕彰する「深澤晟雄資料館」維持経費をなんとか確保し、皆さんの協力を得ながら頑張っていきたい。

深澤晟雄資料館

住所：〒029-5614
岩手県和賀郡西和賀町
沢内字太田 2-68
TEL：0197-85-3838
FAX：0197-85-3838

